

教職実践演習プログラムの開発と実施に向けた取り組み

教職実践演習プログラムの開発と実施に関する研究プロジェクト
(附属教育実践総合センター)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部附属教育実践総合センター

Trial on the Development and Practice of Program of Practical Training for Teaching Profession

Research Project on the Development and Practice of the Program of Practical Training for Teaching Profession

Center for Educational Research and Teacher Development, Kagawa University, 1-1
Saiwai-cho, Takamatu 760-8522

要旨 平成25年度より全面実施される「教職実践演習」のねらいに即した実施内容及び実施体制の在り方について、学内外における先行研究の成果を踏まえ検討するとともに、試行実践を通して有効なプログラムの開発を行うことを目指した。本稿では、その経緯を報告するとともに、試行実践における学内教員による5回分の授業への学生からの質問紙調査の結果も参考にしながら、改善の視点、今後の検討課題を明らかにした。

キーワード 教職実践演習 プログラム開発 授業改善 教職課程での学び 自己の成長課題

はじめに

平成23年度より「教職実践演習プログラムの開発と実施に関する研究プロジェクト(2年)」を開始した。その設定趣旨は、以下の通りであった。

平成18年「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(中教審の答申)の改革の具体的方策の一つとして「教職課程の質的水準の向上」があげられ、その中で、「教職実践演習」(仮称)の新設・必修化が示され、平成25年度からその全面実施が求められた。

「教職実践演習」設置のねらいは、①教職課程の授業科目の履修や教職課程以外での様々な活動を通して学生が身に付けた資質能力が、教

員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標に照らして確認することである。そして、②学生自身が、将来教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や経験を補い、その定着を図ることである。

このことに関して、本学ではすでに平成21年度に課程認定を受け、その実施に向けて、平成22年度生から「教職概論」において「学びの履歴」を配布するなど準備を進めてきたところである。しかし、「教職実践演習」の授業自体については、シラバスの案は策定しているものの、具体的な実施内容、及び実施体制に関して

は未確定であり、早急な内容の検討と体制の構築が求められている。

そこで、本研究プロジェクトでは、上記の「教職実践演習」のねらいに即した実施内容及び実施体制の在り方について、学内外における先行研究の成果を踏まえ検討するとともに、試行を通して、有効なプログラムの開発を行うことを第一義とする。その際、「教職実践演習」の特質から考えて、本授業科目を中心としながらも、入学時から卒業時までの4カ年を見通した教員養成カリキュラム全体の改善についても視野に入れたいと考えている。

上記の設定趣旨にあるように、「教職実践演習」とは、学生が授業や様々な活動を通して学んできたことを、大学の設定する教員像や到達目標に照らして確認することであり、また、学生が教員になる上で、自己の課題を明確化し、これまでの学びで不足している知識や経験を補ってその定着を図るものである。すなわち、「教職実践演習」とは、学生にとっての最終確認としての授業科目であり、大学にとっては質保証が問われる授業科目であると言えよう。

本授業科目は新設科目になるため、内容をいかに設定していくかが最大の検討課題となる。そこで『学びの履歴』にある5つの事項(①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科の内容等の指導力に関する事項、⑤教育課題の探究に関する事項)を踏まえながら、内容や評価規準を検討することにした。それとあわせて、実際に大きな課題となる実施体制をいかに組んでいくかの検討も進めた。

本稿では、まず、本プロジェクトでの試行実践へ向けた実施内容・体制策定への経緯及びそこで議論になった検討課題を報告する。次に、試行実践における学生への質問紙調査をもとに明らかになった改善のための視点を示す。それらを踏まえ、「教職実践演習」に関わる今後の課題について検討していく。

1. 研究プロジェクトの経緯と「教職実践演習」をめぐる検討課題

(1) 1年次(平成23年度)における検討課題と部分試行実践

本研究プロジェクトは、学部と附属学校園の教員の連携・協力とともに、教員養成・研修の一体化の視点から香川県教育センターの先生方のご協力も得ながら、研究体制を組織した。研究プロジェクト会合は学内委員のみによる2回を含め、計9回開催した。

まず、設定趣旨の確認を行い、今後の研究の進め方を確認した。その後、先行研究のレビューとして、教職実践演習に関わる学内の研究(これまでのセンター研究プロジェクトの成果及び「追跡調査」と他大学の研究論文や先行実践を確認・検討した。また学内のコアカリキュラム委員会での検討課題も踏まえつつ、「教職実践演習」の実施内容や実施体制を検討し具体化することになった。

授業内容として、「教育課題の探究」、「授業づくり」、「学級経営」、「生徒指導等」の大きく4つの課題(柱)を立て、学部の既存授業科目のシラバス等も参照しながら、それぞれの内容と授業実施案の策定を進めた。11月には、4つの柱でのそれぞれ2校時分(90分×2回)の部分試行授業を実施した。各授業後には、学生と授業参観教員に質問紙調査を実施した。アンケートのデータを分析し、授業内容や実施体制を改善していくための視点や検討課題を明らかにした。

また、それらと平行してフィールド・実務研修型の授業の在り方についての検討をはじめた。

平成24年度に学部による全面試行がなされることを視野に入れながら、検討課題(下掲【今後の検討課題】)を確認し、研究の進め方について検討を行った。なお、研究成果については、学内の「教職実践演習開設WG」へ提供した。

【今後の検討課題（要点）】

- ①現場へ入った時に役立つような授業となるよう、さらなる内容の改善充実を図る。
- ②現場でしか身につかないものもあるので、この授業だけで自己完結しようとしなない。
- ③授業においては、より学ぶ側の学生の主体性を考える必要がある。
- ④評価の視点（「学びの履歴」）から、授業内容の改善充実に向けてさらなる検討を行う。
- ⑤教職につかない学生への対応をどうするか、検討する必要がある。
- ⑥授業を実施する際のグループ分け（課題別・校種別等）について検討する必要がある。

（2）2年次（平成24年度）における試行実践と改善案の策定

平成24年度の研究プロジェクトでは、全面試行に向けた検討を進めた。現場でなければ身につかないものもあるという限界を認識しながらも、この授業を通して、学生自身がこれまでの自己の学びの最終確認ができるとともに、現場で役立つようなものも提供できるような質の高い授業内容及び実施体制の改善充実を図ることが主眼となった。

また、前年度に導き出された検討課題である、学生の主体性を導き出せるような授業、授業を運営する際のクラス構成（学生・教員）、評価の在り方等も含めて、様々な視点から検討を行った。こうしたプロセスを経て、「授業実施計画（学習指導案）」、「ワークシート」、「ルーブリック」の改訂作業が進められ、その成果を学内の「教職実践演習開設WG」及び「教職実践演習担当者会議」に提供し、10月から全面試行が行われた。

授業終了後の研究プロジェクトでは、4つの課題の担当者から実施報告及び今後の検討課題が報告され、委員による検討が行われた。平成25年度の全面実施に向けた課題を共有、再確認した。なお、これらの成果については、学内の「教職実践演習開設WG」へ提供するとともに、学部附属教員の合同研究集会（2月）でも議論

されることになった。

次節では、試行実践における学生への質問紙調査から明らかになった、改善への視点を示していく。

2. 試行実践から明らかになった改善のための視点

平成24年の試行実践における学内教員担当による5回分（オリエンテーション及び4つの柱・各2校時分）の授業について、授業後、学生への質問紙調査を行った。各授業における質問紙調査の有効回答者数は、①オリエンテーション：96名、②教育課題の探究：86名、③授業づくり：75名、④学級経営：70名、⑤生徒指導：71名である。

学生からの「自己課題が補充できたか」、「教職課程での学びを振り返り、まとめ、みつめ直せたか」、「受講を通して何らかの変化がもたらされたか」、「これからの自己の成長課題が見えたか」の4つの回答及び5授業とも出席した学生の自己評価数値分布から、分析を行った。

①グラフ「自己課題が補充できたか」（図1）

有効回答者のうち7割の学生が、自己課題が「補充できた」「どちらかといえば補充できた」側に回答し、2割の学生は明確に達成したと回答している。一方、「どちらかといえば補充できていない」とする学生も、各授業において2～3割認められた。

②グラフ「教職課程での学びを振り返り、まとめ、みつめ直せたか」（図2）

有効回答者のうち8割前後の学生が、教職課程での学びを「振り返り、まとめ、みつめ直せた」側の回答をし、3割前後の学生は明確に達成したと回答している一方、1～2割の学生は、達成できていないと回答している。

③グラフ「受講を通して何らかの変化がもたらされたか」（図3）

有効回答者のうち7～9割の学生が、受講を通して「何らかの変化がもたらされた」側

の回答をし、3～4割の学生は明確に変化があったと回答している。一方、1～2割の学生は「変化はなかった」側の回答を寄せている。

④グラフ「これからの自己の成長課題が見えたか」(図4)

有効回答者のうち8～9割の学生が、受講を通して「これからの自己の成長課題が見えた」側の回答をし、3～5割の学生は明確に「自己の成長課題が見えた」と回答している。一方、1～2割の学生は「これからの自己の成長課題が見えなかった」側の回答を寄せている。

⑤グラフ「5授業とも出席した学生の、自己評価数値分布」(図5)

さらに、上記有効回答者のうち、①オリエンテーション、②教育課題の探究、③授業づくり、④学級経営、⑤生徒指導の5つの授業全てを受講した学生(50名)を抽出し、上述した4つの評価項目に対する回答傾向を見てみたい。「達成できた」と回答した場合に4点を、「どちらかといえば達成できた」と回答した場合に3点を、また「どちらかといえば達成できなかった」と回答した場合に2点、「達成できなかった」と回答した場合に1点を与え、各評価項目について、5回分の授業における回答点数を積算した。5つの授業全

てを受講した50名の学生の、5回分の授業における回答点数の積算について、人数分布をグラフに示したものが、図5である。

グラフを見ると、「受講を通して何らかの変化がもたらされたか」について、8名を超えるピークが16点と18点にあり、また「今後の自己の成長課題が見えたか」については、8名を超えるピークが15点と19点にある一方、「自己課題が補充できたか」については、8名を超えるピークが13点と15点にとどまっている。大まかな傾向として、平成24年度「教職実践演習」5回分の授業全てを受講した学生は、「受講を通して何らかの変化がもたらされた」「今後の自己の成長課題が見えた」と受講の成果を捉えていることに対し、「自己課題の補充」については、受講生にとって達成感が低い傾向にあったものと捉えられる。

以上のように、概ね良好な成果が見られたが、「自己の課題の補充」については、今後の改善のための視点として浮かび上がった。4つの課題担当者からの報告、委員からの指摘に加え、学生自身が自己の課題の補充ができるような授業内容や授業方法を検討していくことが検討課題となり、全面実施に向けた改善案の作成を進めた。次節では、その概要を報告する。

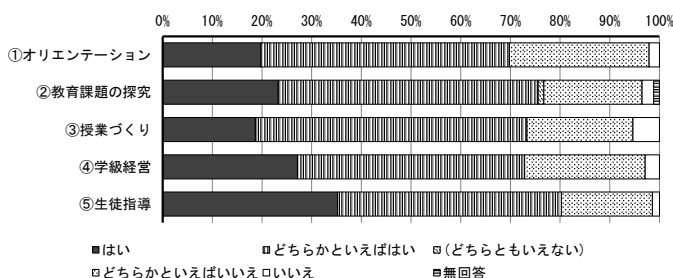


図1 自己課題が補充できたか

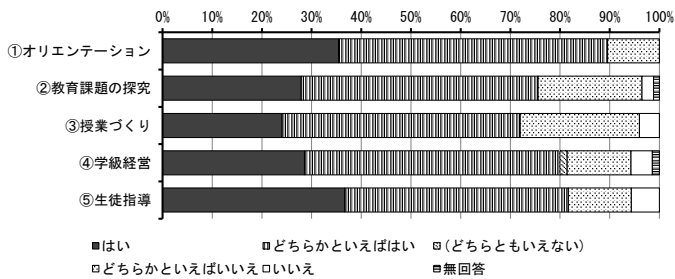


図2 教職課程での学びを振り返り、まとめ、見つめ直せたか

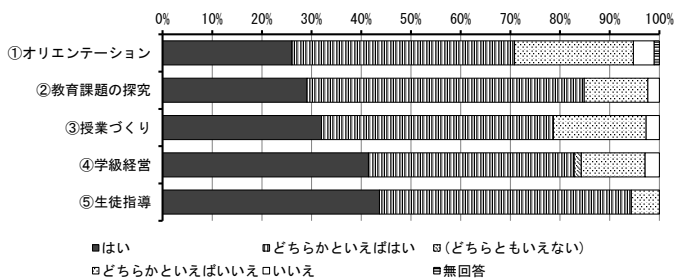


図3 受講を通して何らかの変化がもたらされたか

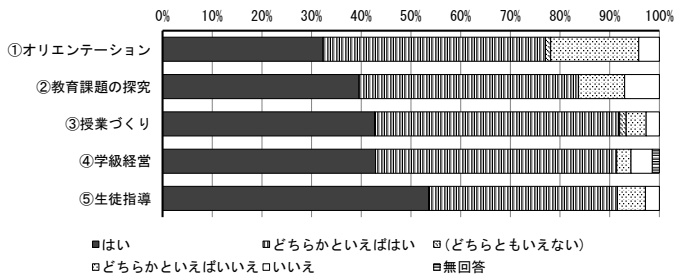


図4 これからの自己の成長課題が見えたか

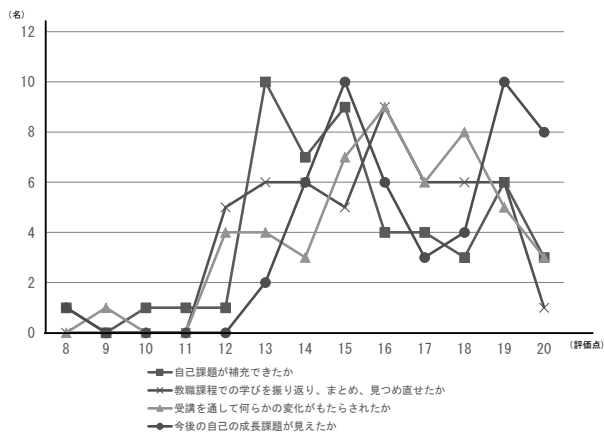


図5 5授業とも出席した学生の、自己評価数値分布 (n=50, 4点×5授業)

3. 平成25年度全面実施の4つの課題の概要

ここでは、4つの課題の実施案についての概要を示しておく。

①「教育題意の探究」について

教育課題を探究していくために必要な基礎的知識や今日の教育課題を確認するとともに、これまでの学生自身の学びを手がかりに、1つの実践的教育課題に対する具体案を考察する。45分の基礎的知識確認のための全体講義後、各組にわかれて班討議を行うことを通して具体案を考察する。(資料1～3を参照)

②「授業づくり」について

授業づくりにかかわる自らの課題を確認した上で、1時間の授業のうち導入15分間の学習指導案(細案)を、班討議を行うことを通して作成し、模擬授業を行う。(資料4を参照)

③「学級経営」について

魅力ある学級経営に向けて、学級担任が準備しておく内容を全体講義で確認する。その後、各組にわかれて「学級びらき」の演習及び事例を視聴し、班討議を通して子どもとの関係性を構築する方法を考察する。

④「生徒指導」について

生徒指導の意義や課題について全体講義で確認する。その後、各組にわかれてアサーショントレーニングを行い、さらに生徒指導の具体的な事例にかかわる選択課題と共通課題の演習を行う。

「授業づくり」を除く3つの課題では、全体講義後、各組にわかれて演習形式で進めることにした。4つの課題ともアクティブ・ラーニングを採用した。個人ワーク(検討)後、班での討議を行い、討議後には必ず全体発表を行うことを求めた。こうした方法により、学生の能動的な学びが保証され、また学びの質も深まると考えたことによる。

おわりに

本稿では、研究プロジェクトで検討を進めてきた経緯を報告するとともに、「教職実践演習」の授業化に伴う予想される検討課題を明らかにし、それらへの対応を踏まえたプログラム(案)の策定を目指してきた。プロジェクトで作成したプログラム(案)は、学内の「教職実践演習開設WG」へ提出され、「教職実践演習担当者会議」を経て、平成25年度の10月より全面実施されることになった。学生に配布される「基本テキスト」及び授業担当教員に配布される「教職実践演習の手引」は、プロジェクトで検討されてきたものを中心に構成されている。詳しくは「テキスト」「手引」を参照されたい(一部文末に資料1～4として添付)。

平成25年度からの「教職実践演習」全面実施による成果の検討が今後必要となるが、プロジェクトで残された課題や今後の予想される問題群6点を示しておきたい。

①「自己の課題の補充」について

「2」で示したように、「自己の課題の補充」については、学生にとって達成度が低い傾向にあった。内容、方法について改善を試みたが、全面実施の結果の検討が必要である。あわせて、「教育実践演習」の中心となる「教職課程での学びを振り返り、まとめ、みつめ直せたか」、「受講を通して何らかの変化がもたらされたか」、「これからの自己の成長課題が見えたか」についての学生の達成度の自己評価を分析・評価していく必要がある。

②評価について(ループリック、フィードバック等)

評価規準及び評価基準をループリックとしてまとめたが、4つの課題それぞれのループリックの整合性をより図っていく必要がある。また、授業において「行動観察」を行っているが、その評価が難しいというのが現状であろう。行動観察を継続する場合、より客観性を保てるようなループリックの作成が求められる。さらにまた、学生へのフィード

バックについても検討していく必要がある。

③「教育課題の探究」と他の3つの課題（柱）について

「教育課題の探究」の内容は多岐に渡る。他の3つの課題「授業づくり」、「学級経営」、「生徒指導」における諸課題も「教育課題の探究」と言える。「教育課題の探究」が1つの課題となり得るのか、もしくは、あとに続く3つの課題の前提としての位置づけ（基礎的事項の確認の講義）となるのか等を検討していく必要がある。前者の場合、シラバスの「到達目標」にある「教師に求められる専門知識と幅広い教養を身につけている」を中心としつつも、他の3つの課題につながる導入的なものにしていく必要がある。

④既存の授業科目との整合性について

既存の授業科目を通して学んだことの最終確認としての「教職実践演習」であり、既存科目の授業内容との整合性を図る必要がある。場合によっては、既存の授業科目の見直しも必要になろう。

⑤フィールド・実務研修（インターンシップ）の実施に関して

本プロジェクト研究では、学内教員による授業に焦点化した報告となったが、フィールド・実務研修型の授業の実施内容と方法について、全体の整合性という視点から再検討していく必要がある。

⑥授業運営について

1クラスの人数やグループ数、担当教員の数について、全面実施の結果をから検討していく必要がある。

実践的な指導力をもつ教員養成が目指されている今日の教員養成系大学において、「教職実践演習」の授業を充実させていくことは重要な課題である。大学としては、学生のこれまでの様々な場面での学びを有機的に統合することを支援し、質保証を行う必要がある。学生にとって、これまでの学びを補充・深化・統合でき、教員になる上で、自己にとっての課題を自覚

し、不足している知識や経験を補い、その定着を図れるような授業とならなければならない。

平成25年度の全面実施の結果を分析し、さらなる改善を図っていくとともに、「4カ年を見通した教員養成カリキュラム全体の改善」を進めることが大きな検討課題となる。

本研究プロジェクト委員

<平成24年度>（所属は当時）

七條正典、山岸知幸、宮前義和、松下幸司（附属教育実践総合センター）／櫻井佳樹、伊藤裕康、笠潤平、岡田知也、米村耕平、黒田勉、山下明昭、池西郁広、山下真弓、大西えい子（香川大学教育学部）／山村勝哉、山西達也（附属高松小学校）／山内秀則、篠原智子（附属坂出小学校）／清水一郎、植田浩之（附属高松中学校）／近藤てるみ、鷺辺章宏（附属坂出中学校）／福家美香、妹尾恭子（附属特別支援学校）／水津幸恵（附属幼稚園）／齋藤知子（附属幼稚園高松園舎）／倉沢均、山本木ノ実（香川県教育センター）

<平成23年度>（所属は当時）

七條正典、山岸知幸、宮前義和、松下幸司（附属教育実践総合センター）／伊藤裕康、松本康、岡田知也、米村耕平、黒田勉、山下隆章、山下真弓、大西えい子（香川大学教育学部）／吉原功雄、川地由美（附属高松小学校）／山内秀則、篠原智子（附属坂出小学校）／藪内康則、三好一生（附属高松中学校）／近藤てるみ、氏家徹也（附属坂出中学校）／沼野生幸、奈良早苗（附属特別支援学校）／谷口美奈（附属幼稚園）／齋藤知子（附属幼稚園高松園舎）／國木良輝、山本木ノ実（香川県教育センター）

教職実践演習「教育課題の探究」

1. 授業の目的

教育課題を探究していくために必要な基礎的知識や今日的教育課題の再確認を行う。
これまでの学びを手がかりに、1つの実践的教育課題に対する具体策を考察する。

2. 授業の概要

○1校時【前半・全体講義、後半・組別個人ワーク】

- ・全体講義 — 「教育課題の探究」の前提となる基礎的知識・今日的課題の確認
- ・個人ワーク — 4つのアクション（香川県教育委員会）の提言の理解と具体化

○2校時【組別演習及び発表】

- ・班活動 — 4つのアクションの3つの提言の具体化の検討
- ・発表 — 各班で検討した提言の具体化を、根拠を示しながら発表
- ・まとめ — 担当教員による本時のまとめと次回の説明等

3. 評価の方法

「教育課題の探究」の内容については、提出を求めるワークシートをもとに、以下の2つの観点から、ルーブリックを用いて評価を行う。

【教職の使命】 教育改革の動向について理解し、自己の課題と重ね合わせながら教育課題を探究できる。

（講義内容を理解し、現在の教育改革の動向を踏まえながら、自己の実践レベルの課題を把握していることがうかがえる。）

【探究心】 常に課題意識を持ち、その解決に向けて探究しようとする意欲・姿勢がある。

（自己の一つの課題だけではなく、他の課題にも関心を示し、教育課題を全体的・有機的に捉えようとする姿勢がうかがえる。）

4. 提出物について

別途配布のワークシート（1枚・A3）を、教育実践総合センター事務室に備え付けのボックスに提出する。なお、ワークシートは返却しないので、学生それぞれが必要に応じてコピーを取っておくこと。

使用する資料の出典について

○責任感と危機感を持って取り組む4つのAction 子どもに確かな学力を！～平成22年度全国学力・学習状況調査、県学習状況調査の分析から～ 香川県教育委員会事務局義務教育課 平成22年

○責任感と危機感を持って取り組む4つのAction 子どもに確かな学力を！～平成23年度県学習状況調査、教員意識調査の分析から～ 香川県教育委員会事務局義務教育課 平成24年

資料2

「教育課題の探究」ワークシート

③グループ討議で議論になったことを整理しよう

組： _____ 班： _____ 氏名： _____

【全体講義】 理解したこと、確認できたことをまとめてみよう

④他のグループの発表から学んだことをまとめてみよう (200～300字)

【演習】 各グループに、検討する「1つの Action」（改訂版より）を指定します

① Action のデータから「提言」（●：3つ）が出されてきた理由を考えてみよう

②あなたのこれまでの「学び」をもとに、3つの提言をより具体化しよう

【まとめ】 授業を通して確認した自己の課題をまとめてみよう (300～400字)

資料3

教育課題の探究・ルーブリック

評価規準	評価基準			評語
	A	B	C	
【教職の使命】 教育改革の動向について理解し、自己の課題と重ね合わせながら教育課題を探究できる。	講義内容を理解し、現在の教育改革の動向を踏まえながら、自己の実践レベルの課題を把握していることがうかがえる。	講義内容を理解し、現在の教育改革の動向を踏まえながら、一般的な教育課題を把握していることがうかがえる。	講義内容をほぼ理解し、一般的な教育を把握していることがうかがえる。	A B C ×
【探究心】 常に課題意識を持ち、その解決に向けて探究しようとする意欲・姿勢がある。	自己の一つの課題だけではなく、他の課題にも関心を示し、教育課題を全体的・有機的に捉えようとする姿勢がうかがえる。	自己の一つの課題だけではなく、他の課題にも関心を示しながら、教育問題を考えようとする姿勢がうかがえる。	他の課題にも若干関心を示すが、自己の教育課題のみを中心に、主観的に考えようとする姿勢がうかがえる。	A B C ×
総合評価	「S」： 2A 「A」： 1A+1B 「B」 2B or 1B+1C 「C」： 2C ただし、1つでも×のあるものは、担当者間で検討する。			

教職実践演習「授業づくり」

1. 授業の目的

授業の主目的は、教育実習を中心に、これまでの「授業づくり」に関わる受講生自らの課題を確認した上で、その課題を補充すべく、班で討議を行いながら1時間の授業のうち導入15分間の学習指導案(細案)を作成し、模擬授業の実施を経て授業討議を行うことによって、自らの課題解決の手がかりを得ることとする。加えて、「授業づくり」のポイントについて本授業を通して再確認した上で、個々の学生がさらなる改善学習指導案を作成する力量を有することを確認する。

本授業の確認点の中心は、学びの履歴のうち、[指導力]の中でも[指導技術の習得]の確認である。

- 学習指導案づくりの基本の習得や子どもの実態に応じた学習の流れの構想
- 指導技術の基本的な内容の理解と実践(板書、発問、話し方など)
- 子どもの関心意欲を大切に、子どもが主体的に学べるための指導方法についての習得
- 自らの授業改善につながる模擬授業や授業討議会への参加

これらのほか、関連する資質能力として、

[教職の使命—教職の理解]

- 求められる教師像についての理解とそれに向けた自らの課題の把握(特に「授業づくり」や学習指導に関して)

[対人能力—協働性]

- 集団の一員としての自覚を持ち、協力して自らの役割を果たそうとする姿勢

[子ども理解—子ども理解のための知識や技能]

- 子ども理解の意義とそのための方法に関する知識や技能の習得

(特に「発達段階についての基礎的な知識」「各学年段階の子どもの思考力や言語力に関する理解」)

[探 究 心]

- 常に課題意識をもち、その解決に向けて探究しようとする姿勢

の各資質能力の確認と補充を目指す。

2. 授業の概要

授業の大まかな流れは以下のとおりである。

- 1校時 自己課題の明確化→班の課題の明確化→指導案と板書計画の作成(グループごと)
- 2校時 模擬授業(2グループごと)→授業検討(グループごと)→全体意見交流→まとめ→レポート指示

3. 評価の方法

学生に求める課題ならびに評価方法については、以下のとおりである。

学生に求める課題	評価対象・評価観点	評 価 方 法
<ul style="list-style-type: none"> ●「グループ課題の明確化」「指導案・板書計画づくり」「模擬授業グループ検討」の各活動におけるグループ討議 ●個人ワークシート 	<ul style="list-style-type: none"> ・対人能力—協働性 ・積極的参加姿勢 	<ul style="list-style-type: none"> ●主担当・クラス担当教員が、それぞれ1つの班を対象に学生の様子を観察し評価する。 ●個人ワークシートを参照し、担当教員がS～Dの5段階で評価する(改善指導案評価シートに記入)。
<ul style="list-style-type: none"> ●演習の振り返り(自己評価)シート 	知識理解、関心意欲態度、思考判断表現、技能	「達成できた」⇔「達成できなかった」4尺度により、学生自身が振り返りと課題の再確認を行う。
<ul style="list-style-type: none"> ●グループごとの指導案・板書計画 ●授業後のまとめ課題として「改善指導案の作成」を求める。 	指導力(教材研究、学習環境、ねらいに基づいた学習課題への展開、関心意欲・児童主体、反応予想と発問 など)	「改善指導案」提出の際、別紙ルーブリックに自己評価とまとめを記入し、表紙として添えて提出。担当教員が評価を加える。

4. 授業関連資料

教職実践演習「授業づくり」における模擬授業課題、小学校授業づくり資料

(当日配布(予定)資料) 個人ワークシート、グループワークシート(指導案用・板書計画用)、

演習自己評価シート、改善指導案作成に関する評価・振り返りシート、改善指導案用紙